

『ダンマパダ』と教育

古田 榮 作

要 旨

『ダンマパダ』は、原始仏教以来もつともひろく仏教徒に尊重愛誦されてきた聖典である。しかし、わが国においては『法句經』の名で漢訳された經典が知られるものの、明治期まではさほど重視される經典とはされなかった。一八八三年にその原文からの抄訳が刊行されたのを皮切りに、一九〇二年以降には原文からの全訳が刊行され、近年では原文をもとにした解説がマスコミを通じてなされるようになっていく。本稿では『ダンマパダ』の幾つかの文章を取り上げ、仏教による「生き方」の教えを教育学の立場から考察する。「実に自分自身こそは汝の守護者である。実に他の誰が（自分の）守護者となりえるのか？ 実に調御された自分が、得難い守護者（＝阿羅漢果聖者）となり得る」の章句は、ベスタロッチの『探究』の「私は、自然の所産であり、類の所産であり、私自身の所産である」の章句と通じるものがある。

キーワード…ダンマパダ 諸悪莫作 忍辱 守護者

『ダンマパダ』(Dhammapada)は、原始仏教時代以来もつともひろく仏教徒に尊重愛誦された聖典とされ、もつとも多く原始形をとどめるパーリ語のものは二六品四二三偈よりなる。釈尊の金口よりほとぼしる無間自説の「法句」、すなわち仏教の妙諦を宣示せる勝句を分類収集したものと称される。平易簡潔にして、しかも巧妙な比喻を交え、その間に仏教の道德観、社会観の根本義を教えて仏教入門の指針となるものとされてきた。⁽¹⁾

しかし、『ダンマパダ』は、上座部仏教(=「小乗仏教」)の經典とされていたので、「法句經」の名で漢訳され、大藏經に加えられているものの、その意義はさほど高く評価されてこなかった。

一八五五年に、デンマークの碩学ファウスベール(Michael Vagso Faustball, 一八二一〜一九〇八)がラテン語翻訳とパーリ原文をロンドンで出版して以来、各種の原典校訂、研究書、近代各国語による翻訳が行なわれてきた。⁽²⁾

日本でも、一八八三(明治十六)年に加藤正廓によりパーリ語原文からの抄訳が『法の道芝』の名で翻訳されたのを皮切りに、一九〇二(明治三十五)年には常盤大定が、一九二二(明治四十五)年には萩原雲来がその全訳を公にしている。⁽³⁾

『ダンマパダ』は、パーリ語で書かれた仏典のうちでは恐らく最も有名なものであろう。……「ダンマ」(dhamma)とは「法」と訳され、人間の真理という意味であり、「パダ」(pada)は「ことば」という意味である。現代語ではしばしば「真理のことば」と訳される。……『ダンマパダ』は人間そのものに対する、はつと思わせるような鋭い反省を述べ、生活の指針となるような教えが述べられている。⁽⁴⁾

また、『ダンマパダ』の諸詩句(偈)は主として出家修行僧のために説かれたものである。しかしまた他方では、世俗人のための教えをも含んでいる。⁽⁵⁾

本稿は、『ダンマパダ』に示された釈尊の教えを、主として人生観と弟子への指導という側面から捉えなおしてみようとする試みである。

☆

最初に仏教の根幹的な教えであるとされる『ダンマパダ』の一詩句(偈)をとりあげよう。

一切の悪業をなさざること、善業を具足すること自分の心を遍く清くすること、これが諸ブツダの教えである。⁽⁶⁾

漢訳の『法句經』では、

諸惡莫作 諸善奉行 自淨其意 是諸佛教⁽⁸⁾

となっている。昔から「七佛通誠偈」といわれるこの詩句は、「諸惡莫作 諸善奉行」というごく当然の「止惡修善」という道德律を仏教独自の「自淨其意」の立場で説いたものである。引用した和訳には「自分の心を遍く清くする」(sacitpariyodapanam) に註が付され、「ここでは、初禪(瞑想の第一段階)に入る時不純な心(五蓋)心を覆う五種の煩惱。五つの障害。即ち一 貪り 二 怒り 三 眠り込んだような無知蒙昧 四 躁鬱の状態 五 疑い)を取り去ることを意味する」とされている。「自淨其意」に関連して宮坂宥勝は、「放縱な欲望は意志にもとづくものであり、理不尽な怒りは感情に関するもの、また人間的な真実の智慧は知能に関係するともに前二者を総合的に統一する全人格的なものであるから、これらによって知情意が網羅されているわけである。みずからの知情意を正しくコントロールすることができるならば、そこに真に主体的な人格の形成がなされるのである。それは人格的にみて、もつとも安定した状態であるとともに、社会的な適応性をもったものである。」と述べており、また片山一良は「出家以後、阿羅漢道を得るまで、いかなる悪しき不善の業も作らないこと、善を起し、修すること、心の障害となる欲貪、怒り、沈いつ・眠気、浮つき・後悔、疑という五蓋から自己の心を浄めること⁽¹⁾」として、戒の防護により悪を断つこと。禪定により心の静まりを得ること、聖道の智慧により煩惱を断つことを説いているとする。悪を行わず、善を行なうことのなかに、意志・感情の統制のみならず智に導かれた行為を求めているのであり、欲界を去ることによる「浄」の獲得は情意とともに安定した人格の形成がなされるとするのである。すなわち、知情意の円満な發達、いかえれば人格の全体的・調和的發達の思想が内包されていると考えられ、そのための方策として戒の護持と禪定による心の安静と智慧を位置づけているのである。

因みに、これに続く詩句には、

「忍辱は最高の苦行なり、涅槃は最高の〔境地である〕と諸ブツダは説く。実に出家者は他を害することはない。沙門は他人を困らせることをしない。」(184)、

「(他人に対し) 無非難にして加害せざる、あるいは(自分に対して) 戒条を守る、あるいは食事に關して適量を知り、あるいは辺境の地を臥坐処とする、あるいは禪定に努力する、これが諸ブツダの教えである。」(185)⁽¹²⁾があり、

漢訳の『法句經』では、それぞれ、

観行忍第一 佛説泥洹最 捨罪作沙門 無燒害於彼 (184) および
不燒亦不惱 如戒一切持 少食捨身貪 有行幽隱處 意識以有點 是能奉佛教 (185)¹³⁾
とされている。

「忍辱」(khanṭi)¹⁴⁾には「自分に何の落ち度もなく他人から理不尽な非難や迫害や辱かしめなどを受けても耐え忍び、これに反撃したりせず、慈悲の心で接すること」¹⁵⁾との註があり、恰も「いじめ」を超越することが「最高の」苦行であるとみなしているかに思われる。他者からの身体的・精神的な圧迫・抑圧を修道のためのひとつの試練として捉えようとしているとさえ受け止められる。それを可能にするのは、最高の境地である「涅槃」を目標として位置づけ、それに到達するための試練と位置づけようとするのもある。単に「受苦」という「受動的な」ものとして、自発的な捉え方が秘められているのであろう。佛果を求める修行者である沙門(特に出家)は「他者」を加害し、困苦に陥れることはあってはならないと説くのである。さらに他者への非難、加害、自己に対する戒律の遵守、適量の食事、(修行に適した)靈地に居住し、心静かに瞑想し、真理を観察することで心身ともに動揺することのない安定した状態である、禪定への努力を修行者に求めている。適量の食事は、生存上不可欠な栄養摂取を意味するばかりでなく、布施で糧を得る出家者にとっては、布施された食物をすべて定められた時間に食すことにも、さらには生存に必要な諸々の物質への欲求を「適量」に、即ち「最低限」にとどめる「少欲」をも意味するものである。さらに草堂などで修行のために起居を同じくする者同士が布施された食物を共に食すという原始共産制に似た生活様式をも含意するのであろう。

この三つの詩句は、諸ブツダの教えとして詠まれたものであり、釈尊以前からの教えとしても注目される。

この三つの詩句に関しては、第一八三偈は「智慧」を、第一八四偈は「慈悲」を、第一八五偈はを「中道」を説く、仏教の生活実践における最も重要な教え¹⁶⁾としてきたのである。

☆

『ダンマパダ』は冒頭の「対【句】の章」で

「【心に関するすべての】法は、心が先立ち、心が最上の【主】であり、心より成る。人、汚れた心で話したり、行なったり、【考えたり】

すれば、荷車をひく〔牛の〕足を追う車輪の如く、苦しみ、その人についてくる。〔1〕

「〔心に関するすべての〕法は、心が先立ち、心が最上の〔主〕であり、心より成る。人、清浄な心で話したり、行なったり、〔考えたり〕すれば、〔人に〕影が離れない如く、楽しみ、その人についてくる。〔2〕⁽¹⁷⁾

という対句を掲げる。漢訳「法句經」では

心爲法本 心意心使 中心念惡 卽言卽行 罪苦自追 車轆于轍

心爲法本 心尊心使 中心念善 卽言卽行 福樂自追 如影隨形⁽¹⁸⁾

と訳されている。

この二つの詩句は、一瞬一瞬生滅変化する心のありようによって、会話・行為が、苦にも、楽にもなると例を通じて、仏教の倫理観を示すものでもある。第一偈の註には、「心に関する法は、心が先立ち〔Manopubbangama dhamma〕⁽¹⁹⁾を解説して、「心とは、所縁（＝認識の対象。対象としてとらえるもの。対象）を考えるから心であり、所縁を知るといふ本質がある。心を意味する語として心（citta 考える）・意（mano 思う）識（vināna 分かち知る）などがある。』⁽²⁰⁾とあり、さらに「五蘊（色・受・想・行・識）の集まりである私たちの身体の中で、心に関するものは受・想・行・識である。仏教では、心は単独に存在するのではなく、その属性によって感知認識される。即ち、その中心的なものは識であり、心の認識主体（心法＝識）とその属性（心所法＝受・想・行）からなると説く。……ここで対象となるのは一瞬一瞬生滅変化する心である。……」⁽²¹⁾とある。さらに「心は、心の主体としての一つの心法（citta-dhamma）と、心の属性（部分的な心の作用・性質・状態など）としての心所法（cetasika-dhamma）からなり、五蘊の識は心の認識主観（心法）、受想行がそれに属性するもの（心所法）であり、一つの心法には必ず多くの心所法が俱起することによって具体的な心を構成すると説く。例えば、一つの果物に必ず形・大きさ・色・味・重さなどの諸々の性質があるように、心にもいろいろなか心所法があり、心が起きると同時に起きる同起（ekappada）、心が滅すると同時に滅する同滅（ekanirotha）、心が所縁としているものと同じく所縁とする同所縁（ekaramāṇa）、心が同じく所依とする同基（ekavathuka）という相が必ず心所にあり、心自身が単独で存在することはない。』⁽²²⁾とも記している。

また、すべてのものの性質を宗教の倫理的立場から区分する三性の考えに立つ、三性門についても「三性とは、善心・不善心・無記心を

意味する。先ず善心は欲界・色界・無色界・出世間に存在し、次の不善心は欲界にのみ存在する。そして無記心には異熟 (vipāka 過去の善悪業の結果として得られた苦楽などの報果) と唯作 (kamma 根を断たれた木の花が実をつけないように、結果を来世に引くことがなく、又業の結果として得られた異熟でもなく、ただ作用のみの無記心) の二種がある。……⁽²³⁾

善心 (kusala-citta) に関しては①欲界善心、②色界善心、③無色界善心、④出世間善心を挙げ、善心はすべてが同一のものではなく必ずそれぞれに優劣の差があるとした上で、①欲界善心は「欲界における福善である布施・持戒・止観の修習などの善行をおこなう心である。これらの欲界善業によつてこの世において安楽を得る。そして死後あの世においても欲界六天界や人間など欲界善趣の報果を得られる。十善業事はこの善心によつて行われ、第一 (『欲界有因第一善心・喜俱智相応無行心』・第五 (『欲界有因第五善心・捨俱智相応無行心』) 善心が最も勝れていると言われる。又この第一・第五善心のいずれかによつて禅定を得るための精神統一がおこなわれる。」と注記し、②色界善心を「この善心を修することによつて色界天に生じて楽を受ける。色界善心は四禅の初禅と第二禅の間に一つを加えて五禅からなる。その修習法については十遍処をはじめ貪を捨断するための十淨想、愚痴を捨断するための十随念、瞋を捨断するための慈悲喜捨四無量心など四十業処がある。」⁽²⁵⁾、さらに③無色界善心を、「この善心は欲界三因凡夫や有学の聖者に生じる善心であり、色界禅定をさらに高いレベルまで修習して得る境地である。その心が極めて寂靜な状態になるため、あるいは四無色界に生起するためにこの四無色界定を修習する。この無色定は心が極めて寂靜甚深微妙な状態である故、一部の禪修行者などは「何にも囚われない最高の境地である」と理想化した⁽²⁶⁾が、しかし仏陀はこれを解脱涅槃の境地からほど遠い有漏の世間定であると戒められた。」⁽²⁷⁾と、最後に④出世間善心については「悟りを得た聖者だけに生じる、欲界・色界・無色界の世間善心より高いレベルの善心である。その代表的なもの八聖道である。出世間善心は八種の四向四果の中の四向、即ち四つの道心がこの善心である。又四道心の報果として得られる異熟心のことである。」⁽²⁷⁾

不善心 (dvyādasa akusala-cittani) についても、「この不善心は三界 (欲界・色界・無色界) に生起するが、しかし、三性門を基準とする時には、特にその多くは欲愛が強い故に欲界だけに属する形で説いている。この十二不善心と常に必ず相応するのが輪廻の根本因である無明 (痴因) である。過去世又は現世において第十二不善心の掉拳心を除いた十一不善心を数多くあるいは強烈に生起させた人は、八十九心の欲界無因第七不善異熟心の捨俱不善異熟意識界によつて死後欲界惡趣地に結生すると説く。」⁽²⁸⁾

元花園大学長の山田無文は、この対句の意味を「人間の意志こそ、すべての存在の意味と価値を決定する基本である、と示されるのである。……」

このブツダのお言葉には、人間の意は本来清らかなものであるという前提を知っておく必要がある。人間の本性は自性清浄心、或いは大円鏡智と名づけられ、本来大きな丸い鏡の如く清浄なものである、とブツダは常に論されるのである。……意を浄むることこそブツダの基本的教誡でなかったか。」と先に取り上げた「七佛通誠偈」を挙げ、「さいわいなるかな、心の清きもの、その人は神を見るべし」（「マタイ傳福音書」第五章）と共通する清浄な心を説くものとされている。⁽³⁰⁾ 片山一良は、「もろもろの法、すなわち私たちの業、行為というものはすべて私たちが考え思う心（意）の行為に始まり、それが口の行為、ことばになり、手足の行為、行動になり。それゆえ心を汚さず、心を浄めよう、そうすれば苦は消え、楽になる。これがこのことばの意味であり、教えです。身、口、意の、いわゆる三業が調えば、私たちはいつでもどこでも安らぐ、というのです。」⁽³¹⁾と示すのである。

またオシヨー・ラジーニシ（一九三一〜一九九〇）⁽³²⁾は、釈尊が問題として取り上げたのは、客観世界ではなく、心理学者の研究する心の世界でもなく、主観性、内面性、内なる自己の世界であるとした上で、「自分が実際はだけであるのか、ほんとうに知りたかったら、あなたはいかにして心を止滅させるか、いかにして思考を止めるかを学ばねば成らない。それが瞑想のすべてだ。瞑想とは、心の外にでること、心を落とし、無心と呼ばれる空間におもむくことだ。その無心のなかで、あなたは窮極の真理、ダンマを知る。この心から無心へとおもむくことが「歩むこと」すなわち「バダ」だ。⁽³³⁾と説き、さらに「惨めさは心の副産物だ。」⁽³⁴⁾「惨めさは心の影だ。」⁽³⁵⁾「心とは無意識のことだ、心とは無自覚のことだ。」⁽³⁶⁾「至福も（惨めさ）と同じだ。惨めさは眠りかけていることの副産物であり、至福は目覚めていることの副産物だ。離伏をじかに探し求めることができないのはそのためだ。」⁽³⁷⁾と説き、「不純な心（＝汚れた心）とは、心のことであり、純粋な心（＝清浄な心）、あるいは無心を得たなら、あなたには幸福が影のようにつきしたがう……」⁽³⁸⁾と説くのである。汚れた心と清浄な心の対比が、一方は惨めさに向かい、他方は至福をいう報果につながるものである。

無我、無心が幸福へ、邪念が不孝へとの捉え方には少なからず反発を感じざるを得ないが、自己の姿を正しく把握することにより、充実した生き方が可能になるとしているのである。

☆

「実に自分自身こそ汝の守護者である。実に他の誰が（自分の）守護者となりえるのか？ 実に調御された自分が、得難い守護者（＝阿羅漢果聖者）となり得る。」^{(160)³⁹}

自己の調御の重要性を説く詩句である。この句から私はペスタロッツの言葉を思い浮かべた。ペスタロッツは、「Meine Nachforschung über den Gang der Natur in den Entwicklung des Menschengeschlecht⁴⁰」の中の一節を思い浮かべた。「私は自然の所産であり、人類の所産であり、また私自身の所産でもある。」⁽⁴⁰⁾

ペスタロッツは啓蒙思想の影響を受けて自然史の中で人類の発展を考究し、現在の自分のあるのは、種としての人間に生まれたからであり、また歴史の中で人類（同胞）が築き上げてきた文化のおかげであり、自分自身の思考・行動のが現在の人格を形成してきたのである。即ち、彼の人格は、種としての人間存在、人類の歴史の一面面での歴史的存在としての自己、もしくは社会・文化的な存在としての自己、さらに自己の生育史の築き上げたものとしての人格として把握しようとするものである。筆者が注目するのは、人格の一面面に自己形成の側面を見ていることである。

この一句を友松は「おのれこそ おのれよるべ おのれを措きて 誰によるべきぞ よくととのえし おのれにこそ まことえがたき よるべを獲ん⁽⁴¹⁾」と訳しており、これに相当する偈として「自己心爲師 不随他爲師 自己爲師者 獲眞智人法⁽⁴²⁾」をとりあげてその意を汲もうとされておられる。和訳として掲げたものでは *nātha*（主、守護者、ナータ神、依怙、救護⁽⁴³⁾）を「守護者」としているが、宮坂は、*nātha* は「本来、保護者という意味であるが、宗教的には尊貴なる絶対者、本尊を指す。一般に宗教は礼拝対象として、あるいは宗教的対象として、自己自身とは次元を異にする絶対なる人格的存在を外部に求める。しかるに、仏教では、自己自身が自己の主であるとするのである。……これほど人間中心的な力強い教えはない。」⁽⁴⁴⁾と説いている。

ダンマパダは別の箇所で、

人間に得達することは難しい、人間として生きることが難しい。正法聴聞〔の機会を得ること〕は難しい、〔この世に〕諸ブツダが生起することは難しい。⁽¹⁸²⁾

と仏教独特の世界観も立って、六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上）で輪廻するものであるとしているが、六道の中で人間としての生を享けること自体がむずかしいことであるとするのであり、それは自己を省みるペスタロッチの種としての人間の生を享けることともつながるのであり、「人間は本質的な存在 being ではなく、生成、つまり成りつつあるもの becoming だ。人はひとつの過程、成長、可能性潜在力だ。人間はまだ実現化していない。」と教えるのが仏教の考え方でもある。

ペスタロッチの考察は、種としての人間存在、歴史的・文化的存在としての人間、自己の形成者としての人間存在として人間や自己の人格を位置づけようとするものであるが、独自の世界観に立脚する仏教の教えは、人間を being としてではなく、becoming としてとらえようとする。そこでは「おのれこそおのれの主」として、佛果を求めて自己の心の清浄化を追究しようとするのであり、祈りではなく瞑想などの手段を通じて、無我の境地に至らしめようとするのである。

註

- (1) 『哲学事典』(平凡社)による。
- (2) 『ダンマパダ』の漢訳としては、四種の異本を伝える。
 - 一 法句経 二卷 法救撰・呉維祇難等訳 黄武三年(二二四) 三九品七五二偈
 - 二 法句譬喻経 四卷 晋世法炬共立訳 惠帝の代(二九〇〜三〇六) 四二品二七九偈
 - 三 出曜経 三〇卷 姚秦竺念訳 建元一九年(三八三) 三四品九三〇偈
 - 四 法集要頌集 四卷 法救訳 宋天息災訳 太平興国五年(九八〇)〜咸平三年(一〇〇〇) 三三品九三五偈(宮坂宥勝『暮らしのなかの佛教箴言集』一七〜一八頁)
- (3) 宮坂宥勝、前掲書 一六頁
- (4) 友松圓諦『法句経講義』、二二頁 なお現在利用しやすい『ダンマパダ』の邦訳は
 - 一 萩原雲来『法句経』(一九二二) 岩波文庫 一九三五 www.aozora.or.jp『青空文庫』で公開
 - 二 辻直四郎『法句経』(『南伝大藏経』第二十三卷) 所収 一九七二
 - 三 中村元訳『真理のことは・感興のことは』(岩波文庫、一九七八)
 - 四 友松圓諦『法句経』(講談社学術文庫 一九八五)

- 五 宮坂宥勝『暮らしのなかの佛教箴言集』(ちくま学芸文庫 一九九七)
 - 六 ウ・ヴィジャーナナンダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集『パリー語仏典『ダンマパダ』』(ダンマパダ(法句経を学ぶ会 発行 二〇〇〇)などがあり、『ダンマパダ』の解説書としては
 - 一 山田無文著『法句経 真理の言葉』一九七六
 - 二 友松圓諦『法句経講義』(講談社学術文庫 一九八一)
 - 三 宮坂宥勝『暮らしのなかの佛教箴言集』(ちくま学芸文庫 一九九七)
 - 四 上村勝彦『真理の言葉 法句経』(仏教を生きる 第五卷)二〇〇〇
 - 五 ウ・ヴィジャーナナンダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集『パリー語仏典『ダンマパダ』』(ダンマパダ(法句経を学ぶ会 発行 二〇〇〇)
 - 六 瀬戸内寂聴著『法句経を読む 寂聴 生きる知恵』二〇〇三
 - 七 A・スマサラーナ『原訳 「法句経」 一日一話』二〇〇三
 - 八 A・スマサラーナ『原訳 「法句経」 一日一悟』二〇〇五
 - 七 片山一良『ダンマパダ』をよむ(上・下)二〇〇七
 - 八 佐伯快勝著『智慧のことは』二〇〇八
- などがあげられよう。なお 二の友松のものは昭和九(一九三四)年のラジオ放送のテキストをもとにしたものであり、四の瀬戸内寂聴の『法句経を読む 寂聴 生きる知恵』には、友松の訳を基礎にした瀬戸内の訳(韻文)が掲げられているし、片山のもものはNHKラジオ第二放送の「宗教の時間」のテキストである、解説される詩句には片山による邦訳とパリー語の原文が併記されているのが特徴である。
- 本稿では、ウ・ヴィジャーナナンダ大長老監修、北嶋泰観訳注編集『パリー語仏典『ダンマパダ』』の邦訳・英訳を中心として考察した。その理由は、『ダンマパダ』がパリー語で書かれた経典であり、北嶋の訳は、テーラワーダ仏教(上座仏教)に密接な関係があるからで、あまり知られてはいないが、考察の底本とした。
- (5) 中村元『真理のことは・感興のことは』、三七三頁 なお、水野弘元著『パリー語辞典』によれば、dhammaの訳語としては、法、教法、真理、正義…もの、一切法、諸法の法、一切法、諸法の法が、padaには足・足跡、歩、処、場、所…句、語法があてられている。Thomas Byrom『“Dhammapada” The Sayings of the Buddha』の“A Historical Note”ではDhammaは「法 正義 正当性 原理 真理」を、padaは「道 歩 足 基礎」を意味するとしている。Thomas Byrom “Dhammapada” The Sayings of the Buddha p. XVII
 - (6) 中村元 前掲書 三七七頁～三七八頁
 - (7) ウ・ヴィジャーナナンダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 二二〇頁
- パリー語原文および北嶋泰観によるその英訳を示しておく(『ダンマパダ』詩句の引用以下同様に注記する。なお文末に付された(183)は『ダンマパダ』の章句の番号に付されている番号である)

Sabbapassava akaranam

kusalassa upasampada
sacittapariyodapanam

etam buddhāna sāsanaṃ. (83)

Not to do evil, to cultivate merit, and to purify one's mind — this is the teaching of the Buddhas. (183)

この詩句（＝偈）を中村元は

「すべて悪しきことをなさず、善いことを行ない、自己のこころを淨めること、——これが諸の佛の教えである。」（中村元 前掲書 三六頁）と訳し、友松圓諦は

「ありとある 悪を作さず ありとある 善きことは 身をもつて行い おのれのこころを きよめんこそ 諸佛のみ教えなり」

（友松圓諦 前掲書 一二六頁）と訳し、友松圓諦の訳を基礎とする瀬戸内寂聴は、

「あらゆる悪事をせず あらゆる善行を行い わがこころを きよめるこそ み佛の教えなり」（瀬戸内寂聴 前掲書 一五八頁）と訳し、

また宮坂宥勝は

「すべて悪しきことをせず、善きことを実行し、自身の心を清らかにすること、これが目ざめた人たち（＝諸佛）の教えである。」（宮坂宥勝 前掲書 二七八頁）と訳し、片山一良は

「いかなる悪も行わず もっぱら善を完成し 自己の心を淨くする これが諸佛の教えなり」（片山一良 前掲書 上 三三三頁）、山田無

文は

「もろもろの悪 なすなかれ もろもろの善 奉行せよ 自ら心を 淨むるは これぞ諸佛の 教えなり」（山田無文 前掲書 一五一頁）

と訳しており、Max Müller は

Not to commit any sin, to do good, and to purify one's mind, that is the teaching of (all) the Awakened. と訳し、Harischandra Kaviratna（スリラン

カ人僧侶で大長老で博士）は

Absention from all evil, the doing of good deeds, and the purification of the mind, is the admonition of the Enlightened Ones. と訳し、また世界仏

教協会の訳は

To avoid all evil, to cultivate good, and to cleanse one's mind — this is the teaching of the Buddhas. となつてゐる。（www.buddhanet.net/e-learning

/buddhism/dhammapada.htm より引用 以下同様

（8）『法句經』（210）述佛品（「大正新脩大藏經」第四卷 五六七頁 中段）この詩句は『法の道』の見返しにも英訳と漢訳が付けられている。

（9）ウ・ヴィジャーナタ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 二二二頁

（10）宮坂宥勝 前掲書 六六頁

（11）片山一良 前掲書 上 三四頁

『ダンマパダ』と教育

「他人の悪口をいわず、損なわず、戒律を厳守し、食事の節度を知り、孤独に坐臥し、最高の思惟に専念すること、これが目ざめた者たちの教えである。」(185) (宮坂宥勝 前掲書 二七八頁) と訳し、片山一良は

「耐え忍ぶは最上の修行 涅槃は最上、と諸仏は説く 他を害するは出家にあらず 他を悩ますは沙門にあらず。」(184)

「罵り害することもなく 根本戒をよく守り 食事において量を知り 遠く離れて臥し坐り また禪定によく励む これが諸仏の教えなり」(185) (片山一良 前掲書 上 三三五頁、三六頁) と訳しており、Max Müller は

The Awakened call patience the highest penance, long-suffering the highest Nirvāna ; for he is not an anchorite (pravrajita) who strikes others, he is not an ascetic (sramana) who insults others. (187)

Not to blame, not to strike, to live restrained under the law, to be moderate in eating, to sleep and sit alone, and to dwell on the highest thoughts,—this is the teaching of the Awakened. (185) と訳し、Harischandra Kavirama は

Forbearance which is long-suffering is the highest austerity. The Buddhas declare nirvana to be the supreme state. Verily he is not an anchorite who harms another ; nor is he an ascetic who causes grief to another. (184)

Not reviling, not injuring, practicing restraint according to the moral code (*patimokkha*) leading to freedom, moderation in eating, living in solitude, dwelling with diligence on the highest thoughts — this is the teaching of the Buddhas. (186) と訳し、世界仏教協会訳では

Enduring patience is the highest austerity. “Nibbana is supreme,” say the Buddhas. He is not a true monk who harms another, nor a true renunciate who oppresses others. (184)

Not despising, not harming, restraint according to the code of monastic discipline, moderation in food, dwelling in solitude, devotion to meditation. This is the teaching of the Buddhas. (185) と訳し、

(13) 『法句經』(210) 「大正新脩藏經」卷四 五六七頁上段および註による

(14) ウ・ヴィジャーナンド大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 二二二頁に「忍辱 (Khamati) とあるが 水野宏元の「パーリ語辞典」には、この語のは見当たらない。Khamati なる語は耐える、忍ぶ、ゆるすの語義を、Khamā の語義として我慢、忍耐・大地を挙げておそれ、誤植であろう。

(15) ウ・ヴィジャーナンド大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 二二二頁

(16) 片山一良 前掲書 上 三三三頁

(17) ウ・ヴィジャーナンド大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 一頁～二頁

Manopubbāṅgamā dhammā
manoseñhā manomayā
Manasā ce paduñhena
bhāsati vā karoti vā

『ダンマパダ』と教育

Tato nañ dukkhamanveṭṭi
cakkam va vahato padarñ. (1)

Manopubbāṅgaṃā dhammā

manośeṭṭha manomayā

Manasā ce pasannena

bhāsati vā karoti vā

Tato nañ sukkhamanveṭṭi

chāyāva anapāyini. (2)

All mental phenomena have mind as their forerunner : they have mind as their chief ; they are mind-made. If one speaks or act with an evil mind, suffering "dukkha" follows him just as the wheel follows the hoof-print of ox that draws the crafts. (1)

All mental phenomena have mind as their forerunner : they have mind as their chief ; they are mind-made. If one speaks or act with a pure mind, happiness (sukha) follows him like a shadow that never leaves him. (2)

中村元の訳では

「ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。もしも汚れた心で話したり行なったりするならば、苦しみは、その人につき従う。——車をひく(牛)の足跡に車輪がついて行くように。」(1)

「ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。もしも清らかな心で話したり行なったりするならば、福樂はその人につつき従う。——影がそのからだからはなれないように。」(2)、中村元 前掲書 一〇頁)と訳し、友松圓諦は

「意は諸法にさき立ち 諸法は意に成る 意こそは諸法を統ぶ けがれたる意にて 且つかたり 且つ行わば 輓くものの跡を追うかの車輪のごとく くるしみ彼にしたがわん」(1)

「意は諸法にさき立ち 諸法は意に成る 意こそは諸法を統ぶ きよらかなる意にて 且つかたり 且つ行わば 形に影がそうごとく たのしみ彼にしたがわん」(友松圓諦 前掲書 一二頁)と訳し、宮坂宥勝は、

「もろもろの物事(法)は、意が先に立ち、意が最上のものであり、意より成る。人はもしも汚れた意で語り、あるいは「汚れた意で」行なうならば、それより、彼に苦惱のしたがい来ること、あたかも車輪が索獸の足に(したがう)ようなものである。(1)

「もろもろの物事(法)は、意が先に立ち、意が最上のものであり、意より成る。人はもしも清らかな意で語り、あるいは行なうならば、それより、彼に楽しさのしたがい来ること、あたかも影が「形に」絶えずつきしたがうようなものである。」(2) (宮坂宥勝 前掲書 二五一頁)

と訳し、片山一良は

「もろもろの法は意を先に 意を主に意よりつくられる もしも汚れた意をもって 語りあるいは行なえば それより苦がかれに従う 牛足跡の車輪のように」(1)

- 「もろもろの法は意を先に 意を主に意よりつくられる もしも淨き意をもつて
行なえば それより樂がかれに従う 離れることなきかげのように」(2)(片山一良 前掲書 下 一〇頁―一一頁) 訳し、山田無文は
「すべては意より成る 意こそすべてのもと けがれたる意もて かたらいまたふるまえば 苦しみはたえまじ わたちの車にそつ
つじへ」(一)
- 「すべては意より成る 意こそすべてのもと 清らかな意もて かたらいまたふるまえば 楽しみはつきせじ 影の形にそつごと
く」(2)(山田無文 前掲書 一二頁)と邦訳され、Max Müller は
- All that we are is the result of what we have thought : it is founded on our thoughts, it is made up of our thoughts. If a man speaks or acts with an
evil thought, pain follows him, as the wheel follows the foot of the ox that draws the carriage. (一)
- All that we are is the result of what we have thought : it is founded on our thoughts, it is made up of our thoughts. If a man speaks or acts with a
pure thought, happiness follows him, like a shadow that never leaves him. (2)と訳し、Hartschandra Kaviratna は
- All the phenomena of existence have mind as their precursor, mind as their supreme leader, and of mind are they made. If with an impure mind
one speaks or acts, suffering follows him in the same way as the wheel follows the foot of the drawer (of the chariot). (一)
- All the phenomena of existence have mind as their precursor, mind as their supreme leader, and of mind are they made. If with a pure mind one
speaks or acts, happiness follows him like his shadow that never leaves him. (2)と訳し、世界仏教協会訳では、
- Mind precedes all mental states. Mind is their chief, they are all mind-wrought. If with an impure mind a person speaks or acts suffering follows
him like the wheel that follows the foot of the ox. (一)
- Mind precedes all mental states. Mind is their chief, they are all mind-wrought. If with a pure mind a person speaks or acts happiness follows him
like his never-departing shadow (2)となし、
- (18) 『法句經』(210) 雙要品「大正新脩藏經」卷四 五六二頁上段
- (19) ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 二頁
- (20) 同上
- (21) 同上
- (22) ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 四六八頁―四八九頁
- (23) ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 四六九頁
- (24) ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 四七一頁
- (25) ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 四七三頁
- (26) ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 四七四頁
- (27) ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 四七五頁

- (28) ウ・ヴィジャヤーナンダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 四七七頁
- (29) 山田無文 前掲書 一二頁〜一三頁
- (30) 山田無文 前掲書 一三頁
- (31) 片山一良 前掲書 下 一一頁
- (32) オショウ (和尚ラジニーシ、バグワン・シュリ・ラジニーシ、Oshoあるいは Rajneesh Chandra Mohan, 一九三一〜一九九〇) は、インド生まれの神秘家。漢字で「和尚」と表記される事がある。オショウだけに、師匠を持たない。『瞑想の道』と『愛の道』について教えた。ラジニーシ・チャンドラ・モハン・誕生時に与えられた名前。ラジニーシは王、チャンドラは月を意味する。アチャリヤ・ラジニーシ・一九六〇年頃大
学教授を辞退した後、呼ばれた名前。アチャリヤは教師を意味する。バグワン・シュリ・ラジニーシ・一九六八年頃、弟子を受け入れるに当
たって改名。自らを悟りを得た存在として宣言。…… (wikipediaによる)
- (33) osho 著『ダンマパダ』永遠の真理 三二頁
- (34) osho 前掲書 三三頁
- (35) 同上
- (36) 同上
- (37) osho 前掲書 三七頁
- (38) ウ・ヴィジャヤーナンダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 二〇三頁〜二〇四頁
- (39) Attā hi attato nātho
ko hi nātho paro suya
Attanā hi sudantena
nātham labhati dulleham. (160)
One indeed is one's refuge : how can others be a refuge to none ? With oneself thoroughly tamed, one can attain a refuge (i. e., Arahata Phaka),
which is so difficult to attain (160)
中村元は
「自己こそは自分の主である。他人がどうして (自分の) 主であろうか？ 自己をよくととのえたならば、得難き主を得る・(160) (中村元 前掲
書 三二頁) と訳し、友松圓諦は、
「おのれこそ おのれのよるべ おのれを措きて 誰のよるべじ よくとのえし おのれにこそ まことえがたき よるべを
ぞ獲ん。」(友松圓諦 前掲書 一一一頁) と訳し、瀬戸内寂聴は、
「自分こそ自分の主人 どうして他人が主人であろう 自分をよくととのえたなら 自分こそ得がたい 主人になるだろう」(瀬戸内

寂聴 前掲書 一一八頁)とし、
宮坂宥勝は、「己こそ己の主である。他の誰がまさに主であろうか。己がよく抑制されたならば、人は得難い主を得る。」(宮坂宥勝 前掲書 二七四頁)、片

山一良は、

「自己こそ自己の寄る辺なり 他の何者が寄る辺になろう 自己を調御するならば 得難い寄る辺を獲得す」(片山一良 前掲書 下

一一七頁)と訳し、更に山田無文は、

「おのれこそ おのれのよるべ 他に何の よるべかあらん おのれよく 調べぬれば またなきよるべ」(山田無文 前掲書

一三五頁)と邦訳し、Max Müller は

Self is the lord of self, who else could be the lord? With self well subdued, a man finds a lord such as few can find. (18) と訳し、Harschandra

Kaviratna は

The self is the master of the self. Who else can that master be? With the self fully subdued, one obtains the sublime refuge which is very difficult

to achieve. と訳している。

(40) Johann Heinrich Pestalozzi, "Meine Nachforschung über den Gang der Natur in den Entwicklung des Menschengeschlecht" ff. 170-171

(41) 友松圓諦 前掲書 一一二頁

(42) 『法集要頌經』(213)己身品 「大正新脩藏經」卷四 七八八頁下段

(43) 水野弘元著 前掲辞書による

(44) 宮坂宥勝 前掲書 一一五頁

(45) ウ・ヴィジャーナンダ大長老監修 北嶋泰観 訳注編集 前掲書 二〇五頁

Kicccho manussapattābho

Kicccham maccāna jivanti

Kicccham saddhammassavanam

kicccho buddhānuppādo. (18)

Hars is it to be born a man, hard is the life of mortals. Hard is to gain the opportunity to hear the Sublime Truth, and hard, indeed, to encounter the

arising of the Buddhas. (18)

中村元は

「人間の身を受けることは難しい。死すべき人々に寿命があるのも難しい。正しい教えを聞くのも難しい。もろもろのみ仏の出現したまうこと
も難しい。」(18) (中村元前掲書 三六頁)と訳し、友松圓諦は、

「ひとの生を うくるはかたく やがて死すべきものの いまは生命あるはありがたし 正法を 耳にするはかたく 諸仏の

- 世に出づるも ありがたし」(182) (友松圓諦 前掲書 一二五頁) と訳し、瀬戸内寂聴は、
「人に生まれることは むつかしい 死すべき人々に 生命がつづくのも むるかしい 正法を耳にするのも むつかしい み仏の世にいでますも むつかしい」(182) (瀬戸内寂聴 前掲書 一五七頁) とし、宮坂宥勝は、
「人間として生を受けることは困難である。死すべきもの(＝人間)が生きていることはむずかしい。正しい教えは聞きにくいものであり、もろもろの目ざめた人(＝諸仏)の世に出たもうことは得難いことである。」(182) (宮坂宥勝 前掲書 二七八頁)、片山一良は、
「人間の身は受け難く 死すべきものは生き難い 正しい法は聞き難く もろもろの仏は出現し難い」(182) (片山一良 前掲書 下 一〇頁) と訳し、更に山田無文は、
「人と生るる こと難し 命あること あり難し 法をきくこと また難し 仏にあうこと あり難し」(182) (山田無文 前掲書 一四六頁～一四七頁) またMax Müller は
Difficult (to obtain) is the conception of men, difficult is the life of mortals, difficult is the hearing of the True Law, difficult is the birth of the Awakened (the attainment of Buddhahood). (182) と訳し、Harschandra Kaviratna は
Difficult is it to be born as a human being ; difficult is the existence of mortals ; difficult is the hearing of the Sublime Truth ; rare is the appearance of the Enlightened Ones (Buddhas). と訳し、世界仏教協会は
Hard is it to be born a man; hard is the life of mortals. Hard is it to gain the opportunity of hearing the Sublime Truth, and hard to encounter is the arising of the Buddhas. と訳している。この詩句関する限り、Max Müllerの訳は意を得ていないものといえよう。